

100人以上参加、がん治療報告も フィリピンのランドリート医師も講演

イベルメクチン発祥50年記念シンポ



9月7日、東京国際フォーラムで開催された「イベルメクチン発祥 50 年シンポジウム」

9月7日（日）東京国際フォーラムにおいて「イベルメクチン発祥 50 年記念シンポジウム」が開催された。兵庫県尼崎市から元長尾クリニック院長の長尾和宏医師、島根県松江市の「統合医療センター福田内科クリニック」院長の福田克彦医師、大阪肛門科診療所副院長の佐々木みのり医師の日本人3人に加え、フィリピンからアラン・ランドリート医師が講演した。

いずれも「イベルメクチンー世界の臨床医の証言」（9月4日南東舎刊）の共著者でパンデミック下でイベルメクチンを処方し、多くの患者を救ってきた医師たちだ。その体験に基づき、新型コロナ治療にとどまらない今後の医療におけるイベルメクチンの可能性について語った。

会場にはクラウドファンディング・キャンプファイアーを通じた支援者ら約100人が参加、ノートを取りながら聞き入る医療関係者も多かった。

長尾医師はイベルメクチンを治療の主軸に置いて以来「私の新型コロナ患者は一人も死ぬことはなかった」と強調。福田医師はスライドショーを見せつつ、イベルメクチンが帯状疱疹など多様な疾患に対して効果を挙げている世界からの報告を紹介した。がん患者へのイベルメクチン処方を始めている佐々木みのり医師は「ステージⅣの末期患者にイベルメクチンを投与したところ、約2週間後、『先生、今、とんかつ食べてきたところです』と言いながら、見違えるほどの回復した姿で現れ、奇跡のように思った」と興味深い事例を紹介した。

フィリピンから参加のアラン・ランドリート医師は「新型コロナ禍のフィリピンではイベルメクチンを入手して自己防衛をした患者が多かった」ことを指摘、自身がフィリピンで行ったイベルメクチンの無料配布運動などで数千人規模の新型コロナ患者を救った体験を報告した。また、最近のイベルメクチンを使ったがん治療については「直径 11.6cm の巨大な胆嚢腺がんの患者に高用量のイベルメクチンと高用量のビタミン C 静注を併用したところ、10 か月でがんが完全に消失した事例があった」とも報告した。

最後のパネルディスカッションではさまざまな質問が参加者から寄せられたが、最も多かった質問は「どうしたらイベルメクチンの処方、入手ができるのか」という質問だった。

現在、日本では製薬会社 MSD（米製薬大手メルク社の日本法人）、マルホの2社がオリジナルのイベルメクチンを販売しているが、2社とも事実上、疥癬の治療薬として以外は医師や病院にも販売していない。このため、インド産のイベルメクチンをネットを通じた購入している人も多いが、インド産イベルメクチンの一部からは重金属が検出された例もあることが長尾医師、ランドリート医師らから報告された。

イベルメクチンを処方してもらえる医療機関

シンポジウム終了後、本誌は以下の医療機関でイベルメクチンの処方を希望する患者の相談を受け付けていることを確認した。ただし、日本の厚生労働省はイベルメクチンの適応外処方について2022年9月から健康保険適用を認めない方針に転換しているため、診療・処方は自由診療になる。

医療法人社団緑和会 ストレスケア日比谷クリニック

<https://strescue.com/>

酒井和夫医師

〒100-0066 東京都千代田区有楽町1-6-1 ナビール日比谷6F 電話 03-3581-0205

統合医療センター福田内科クリニック

<http://tougouiryou-fukudaclinic.com/clinic.html>

福田克彦医師

〒690-0015 島根県松江市上乃気9-4-25 電話 0852-27-1200

大阪肛門科診療所

<https://osakakoumon.com/>

〒540-0035 大阪府大阪市中央区釣鐘町2-1-15 電話 06-6941-0919

※リアル診療は電話で予約が必要。

海外からの直接購入も

近くにイベルメクチンの処方してくれる医師がいない方は、フィリピンのアラン・ランドリート医師が同国で製作している純正イベルメクチンの直接購入も可能です。南東舎がフィリピン側からの輸出手続きの一切を代行します。

《 購入方法の詳細は、ishiyama@nantosha.com までお問合せください。 》

医師としての私の人生をこの薬が変えた 比におけるイベルメクチン処方の過去と現在



本日、東京において、イベルメクチン発祥 50 周年という記念すべき式典に出席できることは、私にとってこの上なく光栄なことです。イベルメクチンを発見した偉大な人物——日本が誇る大村智博士は、長年にわたる慈愛に満ちた取り組みと、数え切れない労苦の末にこの画期的な発見へと至ったとことにより、医療界における最高の評価と栄誉に値すると私は思っている。博士は私たちに、今日「イベルメクチン」として知られるものをもたらしてくださった。博士がイベルメクチンを発見したその日は、神が人類に大いなる祝福を授けた日だった。あれから 50 年。そう、人類はこの間ずっと恩恵を受けてきたし、これから先の何十年にもわたって恩恵を受け続けるだろう。

イベルメクチンは、本来であれば新型コロナパンデミックにおいて主役となり得た、最良の抗ウイルス薬だった。しかし、残念ながら、そうは認められなかった。世界は本来、潜在的に致命的な副反応をもたらす実験的ワクチンに晒されるべきではなかった。新型コロナウイルスに対して、効果と安全性の両面で、イベルメクチンに匹敵する抗ウイルス剤は他になかった。

実際、世界的なパンデミックの猛威は 2021 年に終息していたはずだった。私はそう確信している。というのも、フィリピンにおいて何十万人もの人々がイベルメクチンによって救われる現場を、私はこの目で見てきたからだ。しかし非常に残念なことに、フィリピンだけでなく、米国、そして聞くところでは日本を含む世界の他の国々でも、イベルメクチンは抑圧され、誹謗され、正当な評価を与えられなかった。しかし、この記念碑的な書籍『イベルメクチン—世界の臨床医の証言』は、世界が恐怖と混乱と絶望に包まれていたあの危機の時代に、臨床家たちが体験した驚くべき出来事を高らかに、そして力強く響かせている内容だ。

希望の光が差し、イベルメクチンこそが新型コロナに対する最も有効な手段であることが臨床家たちによって証明されたとき、真の解決策が見出されていたはずなのだ。

保健当局の「訓令」

しかし、世界各地で、パンデミックの最中にも診療を継続し、イベルメクチンを用いた医師はごくわずかだった。しかし、患者のために最善の治療とケアを求め、患者を救うためなら何でも

やる覚悟で臨んだ医師はイベルメクチンの劇的効果を目の当たりにした。皮肉なことに、彼らがイベルメクチンの深遠かつ決定的な解決力を実証していたまさにその時、数多いの虚偽の物語が押し寄せた。世界・国際・各国の保健当局から発せられた「訓令」は、困惑すべきことに、新型コロナにイベルメクチンの処方を禁止するなど正反対の立場を取っていた。

なぜか。ただ疑問のみが残る。

なぜ、これほど安全で、多用途で、投与も容易であり、新型コロナ（COVID）の予防、すでに症候を呈した人の苦痛の緩和、重篤例を死から引き戻すことまでできる薬が、抑圧され、さらには禁じられたのか。

しかし、高貴なこの薬の使用を貶めようとするどれほど不名誉な試みがあつたとしても、イベルメクチンは本領を発揮し続けた。新型コロナ諸症候群に対する「チャンピオン」であるという本質を。イベルメクチンを用いた医師たちは勝利を収めた。人々に奉仕するために彼らを用いてくださった神の祝福を私は感じている。

病院に行きたがらなかった患者

個人的にも、私の医師としての30年のキャリアにおいて、イベルメクチンを知って以来ほど心が実満たされたことはない。信じがたいほど低い酸素飽和度にまで陥っても、病院に行かずに回復していく重症新型コロナ（COVID）症例を、私は数え切れないほど見てきた。

例えば、激しい呼吸困難に陥り、酸素飽和度が51%まで低下した患者がいた。イベルメクチン90mgを投与したところ、わずか6時間で酸素飽和度は92%に回復した。

フィリピンでは、非常に重篤な新型コロナ症例に対し、一日に300mgものイベルメクチンが投与された事例もあった。体重60kg成人の駆虫目的の用量は12mg。300mgはその25倍に当たる。

このような超高用量では、副作用として視界内に青い点が現れるなど幻覚的な症状がしばしば現れる。しかし、このような副作用も、患者が快復後、投与量を下げていく中で消失し、不可逆的な問題は残さない。

新型コロナ禍のフィリピンでは、多くの人は病院に行きたがらなかった。なぜなら、病院では高価で有害な薬剤（レムデシビルなど）が投与されていたが、その薬剤の値段はほとんどの人には手が届かず、親族がお金を出し合ってそのような高価で有害な薬剤や気管挿管を行っても、多くの人が亡くなっていたからだ。

しかし、自宅にとどまり、代わりにイベルメクチンを服用した人々は回復した。当時、私は全国規模で、最大1,000人参加のZoomミーティングを隔日で開催し、予防を学ぶ人、すでに発症して改善の道を模索する人の多くに役立とうとした。その活動がフィリピンのメディアに取り上げられ、私は全国的に名を広く知られるようになった。イベルメクチンは私たちの主力薬だったが、私は他にもいくつかの補助療法を推奨した。患者は私から学ぼうと熱心だったが、私も患者から多くのことを学んだ。例えば、薬品情報に列挙されているイベルメクチンと他の薬物相互作用の長いリストの多くが、実際には当てはまらないことにも気づきいた。

人々は、新型コロナ予防のためにイベルメクチンを定期的に服用する一方で、他にどんな薬を飲んでいるかを私に教えてくれた。そして、イベルメクチンを定期的に服用し始めてから、新型コロナ以外の他の疾患が改善した情報を提供してくれた。

糖尿病の人は血糖コントロールが良くなり、不眠症の方は睡眠が改善。慢性の自己免疫疾患を抱える人も良い方向に進んだ。前立腺の問題を抱える人は、イベルメクチンを毎日服用すると夜間頻尿が減った。ある患者は、イベルメクチンを飲む前は指のいずれの関節も痛みなく動かせなかったのに、服用後は両手のすべての指を楽に動かせるようになったと語ってくれた。私はこれらの報告の数々を忘れることができない。



アラン・ランドリート分子栄養学
クリニックでビタミン C の静脈注
射を受けるがん患者ら＝マニラ
首都圏モンテンルパ市

奇跡の赤ちゃん

ここで非常に興味深い症例を紹介する。生後 5 か月の乳児が、新型コロナの消化器症候群を発症して瀕死の状態に陥った。体重は当初 6kg で、激しい下痢でそこからさらに大幅に減少。父親は中等症、母親と 3 歳の姉は軽症の新型コロナで、いずれも呼吸器症状を呈し、イベルメクチンの服用で回復した。

ところが、この乳児は進行した消化器症候群という異なる病態を示した。3 日間にわたって激しい下痢が続き、極度に衰弱してぐったり。発症 4 日目には赤痢様となり、血便を大量に排出。ほとんど授乳できず、泣く力さえなかった。誰もが、この乳児は死に瀕していると悟ったが、母親は 15mg のイベルメクチン・カプセル 1 錠の内容物を小さじ 1 杯のミルクに混ぜ、乳児の口に含ませた。体重当たりの通常量の 10 倍に当たる高用量だった。すると即座に、乳児は回復に向かった。この量を毎日投与し、3 日で完全に回復した。

本日の講演の 3 か月ほど前、その子の父親がすっかり元気になったその子連れて私のクリニックに連れてきて言った。「この子は私の奇跡の赤ん坊です。イベルメクチンが死から救ってくれました!」——今ではとても健康な 4 歳児だと、父親は誇らしげだった。

ワンダードラッグへの弾圧

私たちはイベルメクチンが新型コロナの諸症候群に対して、いかに有効で、いかに安全であるかを見てきた。パンデミックの間、私は Zoom での相談を、イベルメクチンが新型コロナに対して持つ 6 つの作用機序の解説から始めるのが常でした。しかしジャーナル・アンティバイオティクスの総説を目にして初めて、イベルメクチンが新型コロナウイルスと新型コロナに対して実に 20 もの作用機序を有することを知った。対照的に、エボラ出血熱治療薬レムデシビルには一つとして確立された作用機序がなかった。

パンデミック以前、世界中の大半の医師は、この驚異的な薬イベルメクチンについてほとんど何も知らなかった。イベルメクチンは真の「不思議な薬（ワンダードラッグ）」の称号にふさわしいものだった。アフリカで 1 世紀もの間人々を苦しめた河川盲目症を根絶に導き、薬の開発者である大村智博士とウィリアム・キャンベル博士はノーベル生理学・医学賞を 2015 年に受賞した。イベルメクチンは米国の米食品医薬品局（FDA）や多くの国で承認され、世界保健機構（WHO）の必須医薬品リストにも含まれている。

それでも、この薬が世界で広く知られるようになったのはパンデミックになってからだった。しかも、悲しいことに、その真の価値は、数々の論争によって覆い隠されたままだった。フィリピンでは、保健省がイベルメクチンに対して 5 つの中傷的プロパガンダを展開した。すなわち、新型コロナに対する臨床試験がない、家畜用の薬に過ぎない、脳障害を引き起こす、肝臓や腎臓に毒性がある、そして新型コロナには効果がない、と。いずれもまったくの虚偽でした。多くの医師がこれらの嘘に惑わされた。そのため、イベルメクチンを用いた医師は少数派にとどまり、今なお多くの医師がイベルメクチンの処方に対抗の立場を取っている。

パンデミックの初期、私は新型コロナに対して試験されている治療薬について、インターネットを通じて情報を追いつけた。まもなく、中国がクロロキン硫酸塩という抗マラリア薬の有効性を発表し、続いて韓国がヒドロキシクロロキンという抗マラリア薬の有効性を発表。さらに、オーストラリアのモナッシュ大学の研究者が、イベルメクチンという駆虫薬が、試験管内で新型コロナウイルスを非常に効率的に排除できたと発表・出版した。

多くの医師が自らのクリニックでイベルメクチンを用いた治療試験を行い、その成果を発表して、新型コロナの予防と治療におけるイベルメクチンの驚くべき有効性を示した。

良い物語の始まりだった。高潔な臨床家たちが実行可能な治療を見いだしていた一方で、ある種の勢力は、すでに他者によって確立されていた優れた治療を否定する手だてを見つけることに躍起になっていた。なぜなのか。私たちにはただただ、疑問が残る。

38 万人を超える超過死亡

やがて、実験的な新型コロナワクチンが展開された。フィリピンでこのワクチン接種を規定する法律は、上院で承認され大統領が署名した共和国法「新型コロナワクチン接種プログラム」であり、これらのワクチンが実験的性質を持ち、入院、永続的障害、死亡を引き起こす可能

性があることが明記されている。

パンデミックの4年間、フィリピンでは累計38万8,000人を超える超過死亡が発生した。また同期間、期待出生数の不足は94万9,000人を超えた。これらのワクチンは真に有害で、致命的であることが証明され、接種から最長10年にわたりその害が残る可能性もありうる。主因はスパイクタンパクの持続的産生だ。

スパイクタンパクを完全に機能不全にすることはイベルメクチンにしかできない。ワクチン接種を受けた方には、イベルメクチン15mgのカプセルを1日1回、1か月服用し、その後は3日に1回の服用を継続することをお勧めする。

ギランバレー症候群の劇的改善2例

現在、私のクリニックには、過凝固状態、自己免疫疾患、深刻な免疫不全、メタボリックシンドロームの増悪、そして最も治療が難しいターボがん、など新型コロナワクチンに起因するとみられる多数の症例を持つ患者が非常に多く訪れる。その治療においてもイベルメクチンは主要な治療薬であり続けている。私はマニラ首都圏モンテルパ市でオーソモレキュラー医学（栄養・生化学的バランス是正する医学）クリニックを運営しており、イベルメクチンがこのような深刻な疾患を抱える患者さんに非常に大きな助けとなっているのを見てきた。

自己免疫疾患について言えば、乾癬の患者さんが次々に良くなるのを目にしてきた。ギラン・バレー症候群の2例では、患者さんが寝たきりとなり、コップを持つことすらできない状態でしたが、今では健康を取り戻し、まるで発症前のように歩けるようになった。

潰瘍性大腸炎の2例では、何か月も血便が続いていたが、病院では免疫抑制のためのステロイドしか投与されていなかった。患者は私のもとに来て、イベルメクチンを含む免疫調整薬を投与したところ、治療の初期段階で血便は止まり、著明な回復を示しました。バイオマーカーをゼロ水準にするまでには時間を要するが、確かな前進があった。

最近では全身性エリテマトーデスの症例も診た。杖なしでは歩けなかった方が、今では杖に頼らず歩けるようになった。

胆嚢腺がんが消失した事例

がんについては、直径11.6cmの巨大な胆嚢腺がんの症例を経験した。化学療法を完遂しても縮小せず、高用量のイベルメクチンと高用量のビタミンC静注を併用したところ、10か月で完全にがんが消失した。今、私に突きつけられている課題は、さまざまな種類のターボがんに対する治療法を確立することだ。

私は腫瘍内科医ではないが、手術の選択肢を失ったり、化学療法や放射線療法が奏功しなかったりした患者が、代替治療を求めて私のもとを訪れる。乳がんの患者も多く、高用量のイベルメクチンと複数回の高用量ビタミンC静注でサイズが縮小する方もいれば、なかなか改善しない人もいる。イベルメクチンに複数の抗がん作用があることを踏まえ、私は栄養療法や

その他の手法に加えて、補助療法としてイベルメクチンをどう活用できるかを探究している。これが今後の私にとっての最も難しい挑戦となる。

人々は、パンデミックの間にイベルメクチンに助けられたことへの感謝を、私にしばしば伝えてくれる。私は、その言葉にいつも励まされている。

正直に言って、イベルメクチンが作用すると知らなかった疾患がイベルメクチンによって改善していると彼らが語るのを聞き、私は驚かされ続けている。

神がイベルメクチンを与えてくださったことに感謝する。イベルメクチンは、私の医師としてのキャリアをこの上なく満たしてくれただけでなく、私たちが想像もしなかった多くの疾患に苦しむ患者さんを助けてくれたからだ。私は、イベルメクチンなしに医療を実践する自分をもはや想像できない。他の医師たちも私と同じようにこれを評価してくれたなら、私の喜びは完璧なものになるだろう。

私はいつも、イベルメクチンを、この危機の時代における“Jehovah-jirreh”（エホバジレ）と呼んでいる。これは旧約聖書に登場する言葉で「神は人間のために備えてくださる」という意味だ。

アラン・ランドリート

デラサール大医学部卒。マニラ首都圏モンテンルパ市衛生局保健官を経て、現在はアラン・ランドリート分子栄養学クリニック院長。2021年「優秀市民・人道活動家章」、23年「アジアのモダンヒーロー賞」、24年「最優秀公衆衛生推進者章」をそれぞれ受賞。著書に『新型コロナの今 予防と即治療』（2021年）などがある。

ランドリート医師、大村博士と会う

自製イベルメクチン「純正」の鑑定を受ける



9月7日の「イベルメクチン発祥50年記念シンポジウム」に出席したアラン・ランドリート医師(62)は翌8日、北里大学大村智記念研究所から招かれ、同所で大村智博士(90)と面会した。大村博士は既に「イベルメクチン—世界の臨床医の証言」9章にあるランドリート医師の報告を読んでおり「この薬を使って多くの人を救ってくれたことに深く感謝する」と同医師に伝えた。ランドリートさんは「私の方こそ博士の発見に深く感謝している。お会いすることは私の夢だった」と笑顔で伝えた。

大村博士はランドリートさんの求めに応じ、「イベルメクチン—世界の臨床医の証言」の英語版原書、日本語版にそれぞれサインをしたほか、イベルメクチンに関する自身の論文や経歴をまとめた冊子を贈呈した。

ランドリートさん側からは自身がフィリピン国内で製造しているイベルメクチン 15mg カプセル 100錠入りボトル 10 本を大村博士に贈呈した。

この面会にはシンポジウムで講演した長尾和宏医師、南東舎の石山永一郎代表も同席。長尾医師が「大村先生、このランドリートさんのイベルメクチンを北里大で鑑定してもらえませんか」と打診すると、大村博士は岩月正人北里大教授をすぐに呼んで鑑定を指示した。

後日、岩月教授からランドリートさんに届いた正式なメールによると「いただいたイベルメクチンの成分を鑑定したところ 99%以上の成分がエバーメクチン Bla であり、微量のエバーメクチン Blb も検出された。増量剤であるブドウ糖以外の不純物はなく純正なイベルメクチンであることを確認した」と書かれており、ランドリートさんは非常に喜んでいた。

岩月教授によると、開発当初のイベルメクチンは放線菌アベルメクティヌスが発出するエバーメクチン Bla が 80%、エバーメクチン Blb を 20%の割合にして混合していたが、最近、商業ベースで作られるイベルメクチンはエバーメクチン Bla だけのものがほとんどとなっており、それで十分な効果が確認されているという。